

## シンビオ国際カフェサロン2009

### 『国際コミュニケーションと文化ー共に語ろう。私たちのアイデンティティー』

主催：シンビオ社会研究会

2009年の国際カフェサロンは、10月31日（土）午後2時から京大芝蘭会館で17名（講師2名 聴衆15名）が参加して開催されました。

先ず日本に研究で来日された二人の講師から「言語とアイデンティティ」、「日本人らしさと人間らしさとの間」と題するお話を伺い、その後で活発な質疑応答が行われました。

最初にDr. Wilfred van Rooijen氏（JAEA 客員研究員）の講演では、言語は文化的アイデンティティの一つの要素であり、言語・文化は、宗教・民族と密接な関係がある。母国オランダには一つの文化で3つの言語が存在するが、日本が一つの言語だけという事実は自分にとって驚くべきこと。「なぜそうなのか？」を考えることは日本社会の成り立ちを考える上で大事なことではないか？という課題提起がなされました。

質疑応答では、講師の意見に触発されて、「日本には八百万（やおよろず）の神が存在して、全てを包含し許容する価値観が存在する。言語が一つに統一されていることはその結果かもしれない」等の意見や、「鈴虫の音（声）は西洋人には雑音（ノイズ）に聞こえるが、日本人には秋の訪れと侘しさを感じさせる風流な音色に聞こえるとされ、やはり文化的背景によって言葉から受け取る印象は各々異なるのではないか？」といった言語の持つ文化的アイデンティティの多様性を再認識する意見が出ました。

続いてDr. Michael David Radich氏（ウェリントン・ヴィクトリア大学宗教学教授）の講演では、西洋では、自分達とは価値観の異なる「異質性」「不気味性」を持つ東洋趣味を総称してオリエンタリズムと呼び、この姿勢は西洋の優越感、傲慢さ、偏見を表すものなどの批判もある。現代西洋社会においても、この傾向は映画などの文化作品に垣間見える。しかしながら自分が古代インド仏教を研究する過程で意識していることは、言語などの表層部分が仮に異なっても、どこかに人間一般の共通点が存在しているのではないか？という点であるとの主旨で主張がなされました。

質疑応答では、差異を見出すことでアイデンティティを確認する西洋的な物の見方は排他的な考え方に行き着くが、日本人が信仰する仏教には、差異を誇張するのではなく、善人悪人の差異を認めず平等に扱おうとする考え方がある。このように差異を認めるか、否定するか、文化的背景、価値観が異なる社会の中から講師のように共通意識を探ろうとしても相当の困難を伴うだろうが、そこから見出された見解は大変興味深いものになるうとの感想が出ました。

今回の国際カフェサロンはテーマが少し抽象的であったため、果たして議論が噛み合うか少し不安なところもありましたが、日本人のアイデンティティを考える視点が提供されて活発に意見が交換され、聴衆の中には有意義に知的空間と時間に遊ぶことができたとする満足感が漂うものとなりました。



Dr. Wilfred van Rooijen 氏の講演



Dr. Michael David Radich 氏の講演